

# 定着する？ チェーン展開の米国型企业病院

日本の動物病院といえば、獣医師の院長がオーナーという個人経営型が一般的だが、最近、アメリカ型の企業病院が進出してきた。いわば病院

のチェーン展開で、便利な立地、一定の医療レベル、インフォームドコンセントの徹底などを掲げている。

(宮晶子)



「勤務医院長」としてスタートしたばかりの石村さん(左)。「系列病院の獣医師同士で、疑問点などを相談しあえるのもいいですね」という＝東京都江東区で(撮影・小河慶一郎)

東京都江東区、亀戸駅前のショッピングモールに隣接して、この夏オープンしたアテナ動物病院。院長の石村志都さん以下、獣医師、看護師の3人全員が女性で、ソフトな雰囲気が漂う。ここは、全国に約20の動物病院を展開する企業病院「ブイエスシー」の直営病院。中でも「アテナ」は女性獣医師中心の系列病院として、首都圏に7軒ある。石村さんらは、この病院で勤務医、すなわち社員として働いている。

企業病院は、20年ほど前に米国で誕生した。勤務医を希望する人や、家庭があるためパートで働きたい女性獣医師の受け皿となり、発展してきた。

日本の一般の動物病院は、院長が医療・経営を一人で切り盛りしているところが大半だ。しかし、現在の日本も獣医師になる半数は女性。一般の動物病院

は労働条件がハードで、働きにくいケースも多い。

石村さんも、そうした一人だった。大卒後、大学病院や、国内でも有名な医療センターで、外科の経験を積んできた。

「一般の病院は夜間勤務の負担が重く、年齢とともにつらくなってくる。そこで企業病院に移りました。院長としての経験も積めるし、将来、大学にもどることも可能です」という。

経営面はすべて本社が担当するので、医療に専念できる。獣医師も2人なので交代で勤務で

ルアップしなければいけないとみんな思っている。それにはまず獣医師の安定雇用が必要。優秀な若手や女性の働く場を、提供する必要がある」と、創業の意図を話す。

飼い主にとって、企業病院の利点はあるのだろうか。まず、獣医師のレベル。同社の勤務医院長になるには、5年以上の臨床経験など、一定の条件が要求される。さらに、特別な治療や検査の必要なペットは、他の系列病院に迅速に送る

## 緩やかな勤務も可能 女性医師の受け皿に

き、休暇も保証される。

動物病院は、人間の病院と違ってサービス業に分類され、企業が進出できる。しかし日本の企業病院は、ごく少なく、ブイエスシーの歴史も5年。社長の西川芳彦さんは、長く動物病院の経営コンサルタントをしてきた。

「いま、日本の獣医療をレベ

ことができる。院長に問題があれば、交代もできる。そして、飼い主に、一定内容のインフォームドコンセントをすることも義務付けている。

「日本は、同じ病気の説明をするにも、病院によってばらばら。飼い主も高度な医療を望む今、米国のように医療情報のオープン化が必要です」

大型小売店舗と同じように、獣医療サービスに、一定の質の高さをうたっているのだ。さらに、ほとんどの直営病院が、ショッピングセンターや駅の近くという便利な場所にある。

「病院が企業だというと、抵抗感を持つ人もいるが、消費者である飼い主のニーズに添えていくことは当然だし、選ぶのも飼い主です」と西川さん。

日本の動物病院の将来を決めるのは、飼い主たちだ。



さいたま市のショッピングセンター内にある直営病院